

見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

発!

April

S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

April 2025 vol.132

しんかわあらいぜき
◆新川洗堰

所在地：名古屋市北区落合町

交通：名古屋市営バス「新川中橋」停 南西約 800m

庄内川の右岸堤防を東から西へ車で走ると、国道 41 号線を過ぎたあたりで一旦ぐっと下がり、またすぐに上る、堤防道路としては不思議な区間があることに気づきます。この区間に、この地域の治水の歴史が込められています。

庄内川は、岐阜県恵那市の夕立山（標高 727m）に発し、東濃地方から愛知県の尾張東部を経て、名古屋市北西部を流下し伊勢湾に注ぐ、流域面積 1,010 km²、流路延長 96km の一級河川で、徳川義直の名古屋城築城とともに、慶長 15(1610) 年に治水事業が始まったとされ、慶長 19 年に現在の位置に堤防が完成しました。

江戸時代の庄内川流域では水害が続発しました。これは、瀬戸を中心に窯業が盛んになり、陶土の採掘や森林の伐採が行われた結果、上流域の山林が荒廃し、流出した土砂が堆積して河床が上昇したためと言われています。また、庄内川の河床の上昇により大山川などの支川の排水も悪くなり、庄内川右岸（北側）の地域は湿地化していきました。

こうしたたび重なる庄内川の破堤や湿地化を防ぐため、尾張藩の勘定奉行・水野千之右衛門などの尽力により、洗堰の築造と新川の開削が行われました。「天明の治水」と呼ばれるこの工事は、味鋺村内の庄内川右岸堤を長さ 40 間（約 73m）にわたって半分の高さに切り下げ、堰を作って庄内川の水を分流し、新たに開削した新川を通じて伊勢湾に流れるようにする大工事で、尾張藩主徳川宗睦の命により、天明 4(1784) 年に着手、天明 7 年に完成しました。

ところで、この工事の費用は、尾張藩の全ての御蔵米を売却しても不足するほどの 40 万両に上るものでした。藩の許可が得られないと考えた水野は策を巡らせ、極めて低額な見積りを藩に提出し工事を開始します。また、工費不足でも中止されないよう、工区を 200 か所に分け、数 100 か村の農民を取り込み、各地で一斉に工事を開始しました。

水野の想定どおり、工事が始まって早々に事業費の不足が判明し、当初は幕府からの借金や豪商からの調達金でしのいだものの、やがて万策尽きて工事は中止、天明 6 年 10 月に水野は免職となり、蟄居を命ぜられます。しかしながら、全区間で工事に着手されていたこともあり、また、完成を心待ちにする農民たちの声にも押され、水野の周到な計略どおり、再び水野を御普請奉行として工事が再開され、着工から 3 年を経て完成に至りました。これにより、洗堰から下流の庄内川は大雨のときに流れる水量が減り、水害の危険は低下することとなりました。（googleearth の 3 次元画像や googleMap のストリートビューで見ると、堤防の切り下げられた部分の様子がよくわかります。）

しかしながら、庄内川から越水が流れ込む新川沿いの村は、相変わらず水害の危険にさらされ、平成 12(2000) 年には東海豪雨により新川の下流で堤防が決壊、大水害となります。新川開削後の歴史については、別の機会にご紹介します。



googleearth で見た洗堰周辺



◆災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

● 豊川（霞堤）(vol.110,2023.6)

所在地：豊川市牛川町ほか

交通：豊橋鉄道市内線「市役所前」停 北東 約 800m

愛知県東部を流れる豊川は、霞堤の治水構造を利用した一級河川です。豊川は、上流は急峻で水量に恵まれる一方、川幅が狭く、大きく蛇行を繰り返しているため、豪雨などでたびたび堤防が決壊し、洪水を繰り返してきました。

豊川の下流には吉田城とその城下町がありました。天正時代に吉田城主となった池田輝政は、城と城下町を守るために、豊川の堤防に霞堤の構造を取り入れました。霞堤は、堤防の一部を意図的に途切れさせ、川が増水した場合に、途切れた箇所から堤内に設けた遊水地に水を流し、下流での氾濫を防ぐ治水構造です。

霞堤によって吉田の城下町は洪水の被害が軽減されますが、堤内では浸水に悩まされました。昭和 40 年代には、

豊川の水を三河湾に導く豊川放水路が設けられ、右岸側の霞堤は順次締め切られますが、左岸側はいまなお 4 か所残されており、概ね 2～3 年おきに浸水が発生しています。

利用が進む豊川霞堤地区における浸水被害の軽減を図るため、関係機関により、豊川霞堤地区浸水被害軽減対策協議会が設立され、地区の浸水被害の低減に向けた取組が進められています。ハード対策としては、堤内への水の流入を抑えるため、霞堤の切れ目を 2.5～3m 程度低い小堤でつなぐ工事が計画され、浸水は 10 年に一度ほどに減とされています。また、ソフト対策として、地区内の浸水状況をリアルタイムで把握するためのカメラや水位計の設置、水位の情報を届けるメール配信やアプリの提供などが行われています。



豊川霞堤地区浸水被害軽減対策協議会資料より

◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.110 (<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html>) をご覧ください。

★ 蛇池お櫃流し大祭

新川洗堰の脇にある蛇池は、信長の大蛇伝説の残る池です。この池で 10m 以上もある大蛇を見た村人の話を聞いた信長がこれを捕えるため、大勢の家来や農民を集めて池の水を掻き出させましたが、いくらやっても水が減らず、大蛇は見つかりませんでした。その後、この池は蛇池と呼ばれるようになりました。

蛇池のほとりにある蛇池神社では、子どもたちにいじめられていた小蛇を助けた惣右衛門が、妻を亡くした後、この蛇に残された子を養育してもらったという言い伝えにちなみ、毎年 4 月第 2 日曜日に櫃流し神事が行われています。神事では、この蛇への感謝の気持ちを込めて、大厄の男子が、お櫃に入った赤飯を池に流す儀式が行われます。



水問題研究所 HP より

～鉄道で巡る～

城北線は、JR 枇杷島駅から勝川駅までの 11.2km を 6 駅で結ぶ、JR 東海の子会社・JR 東海交通事業が運営する路線です。もとは貨物輸送のための路線として計画されていましたが、鉄道貨物の需要減から旅客路線に切り替えられ、平成 5(1993) 年に全面開業しました。

輸送密度は 1 日あたり 500 人程度で、夕方は 30 分に 1 本、日中と夜間は 1 時間に 1 本、1 両編成のディーゼルカーが走ります。



photo AC より

●ブレイクタイム●

♪ 蛇池千本桜

蛇池周辺では、昭和 30(1955) 年に山田村が名古屋市に編入されたのを記念し、多くの桜の樹が植えられ、蛇池千本桜と呼ばれて親しまれてきました。平成 12(2000) 年の東海豪雨後の河川改修で 1km に及ぶ桜並木は 400m を残して伐採されますが、近年新たに植樹も行われ、美しい桜の姿を取り戻しつつあり、花見シーズンには、桜のトンネルを楽しむことができます。なお、毎年 8 月 20 日に開催される蛇池神社の夏祭では、水面を移動しながら光る金魚花火が演じられます。



水問題研究所 HP より

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災と Seeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター 2025 年 4 月)

